## ４　地区小体連のあゆみ

### ［１］　宮崎市小学校体育連盟

Ⅰ　年間事業

| 予 定 日 | 曜 | 事 業 名 | 主　な　内　容 | 会場（予定） | 開始予定時刻 |
|---|---|---|---|---|---|
| ４月２１日 | 金 | 常任理事会 | 第１回理事会内容検討<br>研究内容、研究組織検討 | 生目台東小学校 | 15:30～ |
| ５月１１日<br>（教科等主任会） | 木 | 教科主任会<br>第１回理事会 | 役員選出　事業計画 | 中央公民館 | 15:00～ |
| ５月２６日 | 金 | 常任理事会 | 水泳・泳力向上大会、陸上競技大会検討、研究推進 | 生目台東小学校 | 15:00～ |
| ６月　８日 | 木 | 学校体育<br>セミナー | 水泳・泳力向上大会検討<br>研究推進（指導案検討） | ひなた総合運動公園 | 終日 |
| ６月　９日 | 金 | 第２回理事会<br>（体育主任会） | 泳力向上大会検討<br>研究推進（指導案検討等） | 中央公民館 | 14:00～ |
| 水泳指導期間中 | | 水泳記録測定 | | 泳力指導と泳力調査 | 各学校 |
| ７月２５日 | 火 | 令和５年度小学校体育地区別講習会 | | 生目台東小学校 | 終日 |
| ８月２２日 | 火 | 第３回理事会<br>（体育主任会） | 年間事業報告・研究部反省<br>事業部反省・次年度の計画 | 生目台東小学校 | 14:00～ |
| １０月２７日 | 金 | 第６４回宮崎県学校体育研究発表大会<br>串間・日南大会 | | 串間市立大東小学校 | 終日 |
| １１月２７日 | 金 | 宮崎市小学校体育連盟授業研究会<br>第４学年　ネット型ゲーム（ソフトバレー） | | 宮崎市立青島小学校 | 13:30～ |
| １１月３０日 | 木 | 宮崎市小学校体育連盟授業研究会<br>第２学年　マットを使った運動遊び | | 宮崎市立穆佐小学校 | 13:00～ |
| １２月１５日 | 金 | 宮崎市小学校体育連盟授業研究会<br>第６学年　ゴール型ゲーム（バスケットボール） | | 宮崎市立西池小学校 | 14:30～ |
| １月２６日 | 金 | 常任理事会 | 年間反省・次年度に向けて | 生目台東小学校 | 15:00～ |
| １月３０日 | 金 | 宮崎市小学校体育連盟授業研究会<br>第５学年　器械運動（マット運動） | | 宮崎市立住吉小学校 | 13:00～ |
| ２月　９日 | 金 | 第４回理事会<br>（体育主任会） | 年間事業報告・研究部反省<br>事業部反省・次年度の計画 | 中央公民館 | 14:00～ |

Ⅱ　事業部のあゆみ

１　水泳競技の部

（１）　大 会 名　　第３回宮崎市小学校泳力向上大会（記録会）

（２）　参加児童　　宮崎市内各小学校５、６年生全児童（　　名）

（３）　実施種目　　○２５ｍ（自由形、平泳ぎ）○５０ｍ（自由形、平泳ぎ）

（４）　実施方法

○　距離の部

・　クロール、平泳ぎで２５ｍ、５０ｍを泳げた児童の割合を提出する。

・　５年の部、６年の部で割合上位の学校に泳力大賞を授与。

・　前年と比べて泳げた児童の割合が飛躍的に伸びた学校に授与する。

○　タイムの部

・　発展型の学習として、各種目男女２名ずつ、タイム測定し小体連が集約する。

・　１００分の１秒以下を切り上げて、１０分の１秒までの記録を提出する

（５）　反　　省

新型コロナウィルス感染拡大防止の観点から、２年間水泳学習が中止となったが、昨年度よりほとんどの学校で水泳学習が実施されている。今年度は昨年度よりも授業時数の確保ができた学校が多く、水泳学習も少しずつコロナ以前の形に戻りつつある。しかしながら、各学校での開催では、学校の実態によっては測定による人員の確保が難しく、全ての学校でのタイムの部の記録の測定を実施することができないという課題が残った。また、距離の部については、水泳学習の実施が完全に戻ってない中での実施のために泳力大賞は設けず、水泳指導を実施し、記録の提出ができた全ての学校に記録賞を配付した。

昨年度からのこの２年間で、コロナ禍の中での水泳学習の実施の仕方についてある程度各学校とも掴めた部分があると思うので、来年度はより多くの学校で記録測定を実施し、この形式での大会の実施を児童にとって有意義なものにしていきたい。

２　陸上競技の部

今年度も一堂に会しての大会は行わなかった。各学校の実態に応じ、可能な範囲で選手種目を実施。また、選手種目にエントリーされなかった児童については以下に示すルールのもと各学校にて一般種目を１種目実施することとした。

（１）　選手種目

①　種目

○　「１００ｍ走」「５０ｍハードル走」「走り幅跳び」「走り高跳び」「ソフトボール投げ」「男子１０００ｍ走」「女子８００ｍ走」

②　ルール

○　基本的には一斉開催の時と同じルールだが、各学校の実態があるため、１００ｍ走は必ずしも直線でなくてもよいこととした。

○　走種目については、県標準記録認定の関係上２人で測定し、遅い方の記録を採用することとした。

（２）　一般種目

①　種目

○　「８０ｍ走」か「５０ｍハードル走」の２種目から、各学校でいずれか１種目を選択して実施。

②　ルール（共通実践事項）

○　「８０ｍ走」

・　スタンディングスタートで行う。

・　距離は８０ｍとする。

○　「５０ｍハードル走」

・　スタンディングスタートで行う。

・　ハードルの台数は５台で行う。

・　距離は５０ｍとする。

③　表　　彰

○　各学校で記録を測定した場合、記録賞を配付する。

○　各学校で記録の測定を行わなかった場合、参加賞を配付する。

（３）　反　　省

本年度も、一堂に会しての陸上大会は実施しなかったものの、各学校で一般種目、選手種目の実施ができた。各学校で記録を測定し記録を提出する流れに少しずつ定着してきたと思われる。しかしながら、今年度も各学校によって実施方法に差があり、６年生児童の意欲の差にも繋がると思われる。次年度は今年度の各学校での実施方法など情報を共有し、できる限りどの学校の６年生児童も意欲を持てる記録会にしていきたい。

３　宮崎市小学校６年生陸上記録会（オリンピックゲームズ）

今年度初めての大会で、宮崎市内の小学６年生を対象に希望を募り、希望者のみの陸上記録会を実施した。初めての取組だったこともあり、参加人数があまり集まらなかった。次年度はより参加人数が集まるよう、各学校への周知を図っていきたい。

＜各種目　５傑＞

女子　１００Ｍ　　女子　８００Ｍ

| 総合順位 | 氏名（所属） | 記録（秒） | 氏名（所属） | 記録（秒） |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 岩本　紗星都（田野） | 14.08 | 日髙　想菜（木花） | 150.49 |
| 2 | 津曲　海空（穂北） | 14.15 | 肥田木　琴葉（佐土原） | 159.11 |
| 3 | 穴見　華乃音（小戸） | 14.19 | 久松　和叶（国富） | 166.92 |
| 4 | 緒方　結愛（大淀） | 14.36 | 村田　真菜（本郷） | 167.39 |
| 5 | 西山　星依来（大淀） | 14.55 | 堀内　結実（倉岡） | 169.93 |

男子　１００Ｍ　　男子　１０００Ｍ

| 総合順位 | 氏名（所属） | 記録（秒） | 氏名（所属） | 記録（秒） |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 甲斐　湊賀（西池） | 13.01 | 岡島　獅（加納） | 200.46 |
| 2 | 田村　歩大（大塚） | 13.02 | 日髙　大翔（田野） | 214.57 |
| 3 | 内田　羽空（本郷） | 13.17 | 久保　悠太朗（宮崎南） | 217.61 |
| 4 | 髙橋　大佑（大淀） | 13.18 | 外川　雄大（大宮） | 221.09 |
| 5 | 末永　愛琉夢（木花） | 13.36 | 加藤　悠真（江平） | 221.45 |

Ⅲ　研究部のあゆみ

1　研究主題・副題

『生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための
資質・能力の基礎を育む体育科学習』
～体育科学習における資質・能力を高めるための ICT の利活用～

宮崎市でタブレット端末が一人一台に配付されてから今年で３年目である。教師や児童もタブレット操作に慣れ、文房具の扱いと同じように日常的に ICT を活用した授業を目にするようになった。ところが、体育科学習においては、タブレットの使用率が低く、「運動量の減少」や「効果的に活用する場面」が分からないといった悩みを持っている先生方が多いことが分かった。そこで、本年度のテーマを「体育科学習における資質・能力を高めるための ICT の利活用」とし、全ての体育主任が、体育科学習の中で、ICT を活用した授業を実践することから始めていきたいと考えた。

2　研究の内容

○　体育科学習における資質・能力を高めるための ICT の利活用（ICT 活用のアイディア集の作成）

授業の目標を達成するための ICT の効果的な活用について研究を深める。ICT を効果的に活用するために、５つの場面「課題提示場面」、「問題解決場面」、「学習評価場面」、「マネジメント場面」、「学校と家庭をつなぐ場面」の中から実践するテーマを１～２つ選ぶことした。体育主任は、「ICT 活用のアイディア集」の形式に沿って資料を作成し授業を行うこととした。さらに、授業を終えた後、加筆・修正を加えたものを提出するようにし、それらを実践事例集としてまとめ宮崎市小体連のホームページに掲載することとした。

【ICT を効果的に活用する５つの場面】

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 課題提示 | 教師が効果的に課題を提示することで、子供たちの学びに見通しを与える。 |
| 2 | 問題解決 | 課題を設定し、解決方法を決め、それを解決していく。 |
| 3 | 学習評価 | 児童が自らの学習を評価し、次の学習にそれを生かす。教師が子供たちにどのような力が身についたかという学習の成果を評価して、それを次の指導の改善に生かす。 |
| 4 | マネジメント | 効率的な教具の準備や説明を短くしたりする。 |
| 5 | 学校と家庭をつなぐ | 学校でも家庭でも子どもが学びたい時に、シームレスに学びを深める。 |

○　宮崎市小体連授業研究会の実施

本年度は、４つの班に分かれて授業研究会を行った。

| 低学年部 | 中学年部 | 第５学年 | 第６年 |
|---|---|---|---|
| マット運動 | ソフトバレーボール | マット運動 | バスケットボール |
| 占部　隼（穆佐） | 小西　凌平（青島） | 戸髙　浩己（住吉） | 田中　佑樹（西池） |

3　研究の実際

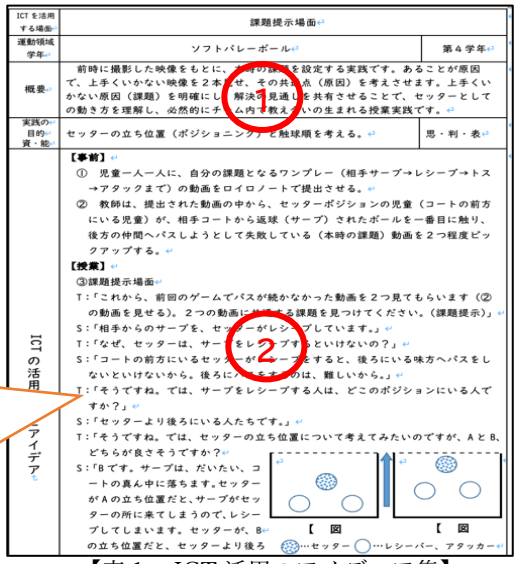
（1）　体育科学習における資質・能力を高めるための ICT の利活用（ICT 活用のアイディア集の作成）

表１は、ICT 活用のアイディア集である。

表１の①には、『概要』を書くようにし、「どんな実践なのか」、「ICT を活用する目的やメリット」を記載した。

表１の②には、『ICT の活用方法とアイディア』を書くようにし、「具体的な授業場面での ICT の活用方法」を記載するようにした。ここでは、教師の発問と予想される児童の発言を会話形式で記載することで、「児童に考えさせたい」ことや「引き出したいこと」が読み手に分かるようにした。

T：「これから、前回のゲームでパスが続かなかった動画を２つ見てもらいます（動画を見せる）。２つの動画に共通する課題を見つけてください。（課題提示）」
S：「相手からのサーブを、セッターがレシーブしています。」
T：「なぜ、セッターは、サーブをレシーブするといけないの？」
S：「コートの前方にいるセッターがレシーブをすると、後ろにいる味方へパスをしないといけないから。後ろにパスをするのは、難しいから。」（略）

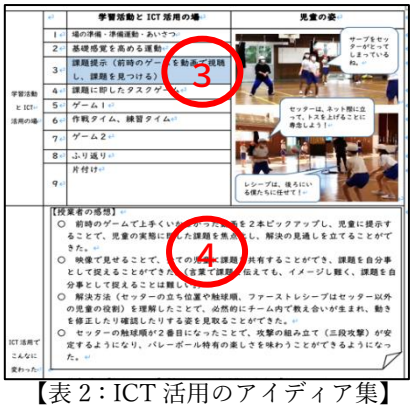


| ICT を活用する場面 | 課題提示場面 | |
|---|---|---|
| 運動領域 学年 | ソフトバレーボール | 第４学年 |
| 概要 | 前時に撮影した映像をもとに、本時の課題を設定する実践です。あることが原因で、上手くいかない映像を２本見せ、その共通点（原因）を考えさせます。上手くいかない原因（課題）を明確にし、解決の見通しを共有させることで、セッターとしての動き方を理解し、必然的にチーム内で教えあいの生まれる授業実践です。 | |
| 実践の目的・資・能 | セッターの立ち位置（ポジショニング）と触球順を考える。 | 思・判・表 |
| ICT の活用アイディア | 【事前】<br>① 児童一人一人に、自分の課題となるワンプレー（相手サーブ→レシーブ→トス→アタックまで）の動画をロイロノートで提出させる。<br>② 教師は、提出された動画の中から、セッターポジションの児童（コートの前方にいる児童）が、相手コートから返球（サーブ）されたボールを一番目に触り、後方の仲間へパスしようとして失敗している（本時の課題）動画を２つ程度ピックアップする。<br>【授業】<br>③課題提示場面<br>T：「これから、前回のゲームでパスが続かなかった動画を２つ見てもらいます（②の動画を見せる）。２つの動画に共通する課題を見つけてください。（課題提示）」<br>S：「相手からのサーブを、セッターがレシーブしています。」<br>T：「なぜ、セッターは、サーブをレシーブするといけないの？」<br>S：「コートの前方にいるセッターがレシーブをすると、後ろにいる味方へパスをしないといけないから。後ろにパスをするのは、難しいから。」<br>T：「そうですね。では、サーブをレシーブする人は、どこのポジションにいる人ですか？」<br>S：「セッターより後ろにいる人たちです。」<br>T：「そうですね。では、セッターの立ち位置について考えてみたいのですが、A と B、どちらが良さそうですか？」<br>S：「B です。サーブは、だいたい、コートの真ん中に落ちます。セッターが A の立ち位置だと、サーブがセッターの所に来てしまうので、レシーブしてしまいます。セッターが、B の立ち位置だと、セッターより後ろ | 【図】 【図】<br>…セッター …レシーバー、アタッカー |

【表１：ICT 活用のアイディア集】

表２の③には、「学習の流れ」と「どの場面で ICT を活用するのか」を書くようにし、授業の流れや ICT を使うタイミングを理解できるようにした。また、児童の様子を写真で示したり、吹き出しを挿入したりすることで「どんな会話を期待しているのか」等、目指す児童の姿を記載することで、他の先生方の参考になるようにした

表２の④には、「授業者の感想」を記載する欄を設けた。「ICT を活用することで変化した学びや指導についての具体的な姿」を書くようにし、本実践のまとめ（成果と課題）がわかるようにした。



【表２：ICT 活用のアイディア集】

（２）　授業研究会

①　単元指導計画の工夫

参観者がこれまでの指導や授業の視点を理解できるように、単元指導計画の中に、「身に付けさせたい力やゴールイメージ（児童像）」、「児童の様子やゲームの様相」を記入する欄を設け、指導者の意図や児童の変容を見取ることができるようにした。

| | | |
|---|---|---|
| ○触球順の役割に気付かせる。<br>１回目…レシーブ（ワンバウンドを利用）<br>２回目…トス（キャッチからの投げ上げ）<br>３回目…アタック（片手、両手ではじく）<br>○触球順に応じた動きや、アドバイスができるようにさせる。 | ○第２触球者を決め、ネット際でボールを操作する良さに気付かせる。<br>○得点しやすい隊形（前衛１人、後衛２人など）に気付かせる。<br>※得点しやすい隊形は、チームの特徴に応じて変わる。 | ○自分のできることやできるようになりたいことを伝えたり、仲間の考えを聞いたりしながらチームの特徴を理解し、チームの特徴に応じた作戦を考えることができるようにさせる。 |
| ○「ワンバン」「キャッチ」「はじく」という声が各チームから聞こえてきた。触球順の役割を共通理解したことで、それぞれのやるべきことが明確になった。ボールをつなぐイメージを共有したことでゲームの様相が大きく変わった。<br>○キャッチ後の投げ上げトスができない児童も何名か見られたので個別に指導して | ○ネットの近くで２番目にボールを触ることで、３番目のはじく動き（アタック）が易しくできるようになり、多くの児童がアタックに挑戦していた。また、２番目に触る人を決めたことで、他の２人の役割も明確になり、得点しやすい隊形について理由を伝え合いながら話し合うチームが多くみら<br>は前衛１人（２回<br>（ど<br>う一<br>ムが | ○自分や仲間のできることやできるようになりたいことをチーム内で共通理解することで、各々の役割を明確にしたり、仲間の願いをかなえるための作戦を立てたりすることができた。<br>○「ワンバン」「キャッチ」「アタック」の流れが上手く機能しているチームが多くなってきた。ゲームの中で、児童の動き（判断）をより速くさせていくために、「キャッチ無し」のルールを追加した。ただし、オーバーハンドパスの場合のみキャッチ有りにした。このルールを追加したことにより、オーバーハンドパスをしようとボールの落下点に素早く入る姿を引き出すことができた。 |

「何が身に付いたか？」（ゴールイメージ）

「児童の様子やゲームの様相」

【表３：単元指導計画の工夫】

②　ICT を活用した授業

第２学年のマット運動の授業（写真１）は、「友達のよいところを見つけよう」の〈めあて〉のもと練習に取り組んだ。児童は、友達の動きを撮影した動画を見せながら、「○○している時に、△△が□□としているところがよい」という話型に沿って、自分の考えたことを友達に伝えることができた。（※○○…技名、△△…体の部位、□□…擬態語、擬音語が入る）

【写真１：第２学年マット運動】

【写真２：第４学年ソフトバレー】

第４学年のソフトバレーボール（写真２）では、〈チームの課題を見つけて、解決策を伝え合おう〉の〈めあて〉のもと、ゲームに取り組んだ。ゲーム終了後、シンキングツールの「PMI/KWL」を用いてチームの課題を焦点化し、その原因と解決方法について他チームも含めて一緒に考えた。写真２は、高いボールをレシーブするための解決方法について児童同士で議論している様子である。アンダーハンドでは、高いボールをレシーブすることが難しく、オーバーハンドの形であればボールをコントロールしやすいといった課題解決の見通しを立てた後、ゲーム２へとつないでいった。

【図１：PMI/KWL】

４　成果と課題

○　ICT 活用のアイディア集を作成したことで、全ての体育主任が ICT の効果的な活用を目指した授業を実践することができた。また、それぞれが作成したアイディア集をまとめ、実践事例集として宮崎市のホームページに掲載することができた。

○　４回の授業研究会では、「授業参観」、「事後研究会」、「実技指導」の柱で会を進めたことで、参加者にとって充実した授業研究会となった。

●　本年度作成した実践事例集の周知を図っていく必要がある。